

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	日本語第二言語話者の敬語使用意識と規範意識：茨城県と大阪府における調査結果より
Author(s)	藤原, 智栄美
Citation	茨城大学留学生センター紀要, 14: 19-29
Issue Date	2016-02
URL	http://hdl.handle.net/10109/12777
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

日本語第二言語話者の敬語使用意識と規範意識：

茨城県と大阪府における調査結果より

藤原 智栄美

要 旨

本稿では、日本語を第二言語とする外国籍の人々が、いかなる敬語使用意識を持つのかを明らかにすることを目的に、茨城県と大阪府で行った調査結果を報告する。分析の結果、上下関係より親疎関係を重視し、敬語の使用を回避したいと望む調査協力者の傾向性が確認され、特にそれは日本語の規範意識の解除が行われやすいL2 話者同士のコミュニケーションにおいて強まることが明らかになった。敬語使用時に心理的負担感が強まる傾向にあるものの、敬語習得については肯定的姿勢が示され、また敬語使用を日本社会のルールと捉えてそれに従うべきとする規範意識が特徴として浮き彫りとなった。

【キーワード】日本語第二言語話者 敬語使用意識 規範意識、敬語習得、敬語回避

1. はじめに

日本語母語話者（以下、L1 話者）と日本語第二言語話者（以下、L2 話者）の接触場面において、対話者との関係性に応じて待遇表現を選択することは、円滑かつ調和的なコミュニケーションを成り立たせるための重要な要素である。第二言語として日本語を話す人々にとって、待遇レベルの選択は日本語コミュニケーションの難しい要素の一つであるが、その選択の方法について対話者間で差異が存在する場合、思わぬ誤解につながることもある。ビジネス、地域社会等、様々な日常場面で生じ得る日本人と外国人のコミュニケーションにおける摩擦を防ぐためには、L2 話者が、待遇レベルの選択の際に大きく影響を与える敬語使用・不使用という言葉行動をいかに捉えるのかを明らかにすることが重要である。そこで本研究では、茨城県・大阪府で行った質問紙調査の結果を基に、日本語第二言語話者が自身及び他者の敬語使用・敬語不使用についていかなる意識を持っているのかを考察する。

2. 調査

2.1 調査協力者

2013年2月から3月にかけて茨城県、2015年7月に大阪府で、日本語を第二言語とする話

者に対する質問紙調査を行った。調査協力者の総数は147名（男性：74名、女性69名、未記入：4名）で、出身国・地域は、中国74名（50.3%）、韓国33名（22.4%）、ベトナム・タイがそれぞれ6名ずつ（4.1%）、インドネシアが5名（3.4%）、マレーシア・フィリピンが3名（2.0%）ずつ、アメリカ・イギリス・台湾・ブラジル・モンゴルが2名（1.4%）ずつ、ネパール・フランス・ハンガリー・ウガンダ・ガーナ・アフガニスタンが1名（0.7%）ずつであった（1名は未記入）。日本語能力については、日本語能力試験N1合格レベル：70名（47.6%）、N2：34名（23.1%）、N3：5名（3.4%）、N4：1名（0.7%）、未受験・未記入：37名（25.2%）である。

2.2 調査項目

本調査では、日本語学習者の敬語観を考察した藤原（2011a、2011b、2012）における事例で日本語学習者が実際に示した敬語のイメージ項目を基に調査項目を設定した。調査協力者は、調査項目に対し、「非常にそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4段階で回答した。表1は、本稿で分析対象とする項目を示している。次節より、「敬語不使用に関する意識と実態」「敬語に対する否定的イメージ」「敬語習得と規範に関する意識」「敬語意識の変容」という4つの観点に関して分析を行っていく。

表1 本稿における分析項目

① 敬語不使用に関する意識と実態
<ul style="list-style-type: none"> ・ 親しい先生に敬語を使いたくない ・ 親しい先輩に敬語を使いたくない ・ ため口を使って、他の人に注意されたことがある ・ 他の外国人に普通体を使いやすい
② 敬語に対する否定的イメージ
<ul style="list-style-type: none"> ・ 敬語を話す時、緊張する ・ 敬語はもっと簡単にした方がいい
③ 敬語習得と規範に関する意識
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語学習者は必ず敬語を学ぶべきだ ・ 日本語学習者は、敬語を正しく使えるようになるべきだ ・ 敬語回避を望む外国人は敬語を使用するべきだ ・ 敬語は美しいと感じる
④ 敬語意識の変容
<ul style="list-style-type: none"> ・ 来日後に敬語についての意識が変わったか

3. 調査結果

3.1 敬語不使用に関する意識と実態

まず、「敬語不使用」すなわち普通体使用に対する L2 話者の意識を取り上げる。筆者は、様々な場面で、目上の人に対して L2 話者が普通体を多用するケースがあるとしばしば耳にすることがある。L2 話者は、目上の対話者に対する敬語使用について、いかなる意識を持っているのだろうか。図 1 は親しい「先生」、図 2 は「先輩」に対して敬語を使いたくないと感じる割合を示している。まず、「先生」については「非常にそう思う」が 9%、「そう思う」が 32%で、合わせて 41%の調査協力者が「親しい先生に敬語を使いたくない」と考えていることがわかった。例として大学での教師と学生のコミュニケーションを考えてみても、通常、教師に対する学生の普通体使用が基本的な待遇レベルでない現状を考えると、10 人に 4 人という値はかなり高い割合といえるのではないだろうか。親しい「先輩」に対しては 61%との結果で、さらに高い値となっている。

こうした敬語意識は、日常のコミュニケーションにおいていかなる形で現れるのだろうか。

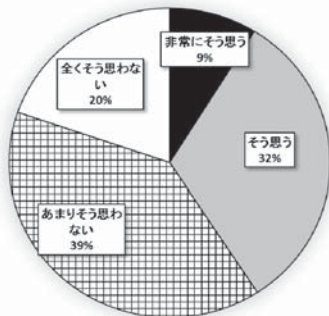


図1 親しい先生に敬語を使いたくない

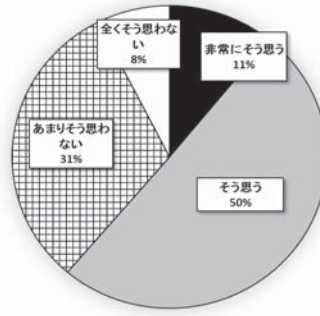


図2 親しい先輩に敬語を使いたくない

図3は、日常のコミュニケーション場面で「普通体（ため口）を使って注

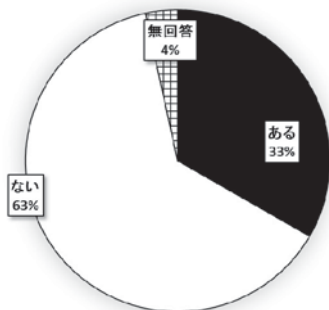


図3 ため口を使って注意されたことがあるか

意されたことがあるかを示している。結果として、33%が「ある」と答え、調査協力者の3人に1人が自身の普通体使用について誰かに注意された経験を持つことがわかった。注意を受けた相手で最も多いのが「先生」で14名、「アルバイト先の店長」が9名で、「先輩」・「おばあさん」という回答が1名ずつだった。これらの結果は、L2 話者の敬語不使用に関する意識から日常生活における敬語回避という実際の言語行動が導かれ、日本語 L1 話者とのコミュニ

ケーション上の問題につながる可能性を示しているといえる。

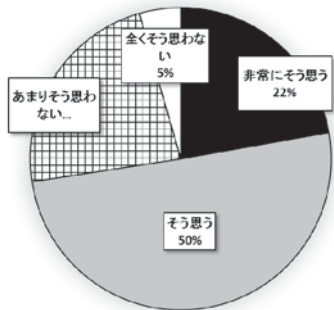


図4 自分より年上の外国人に普通体を使いやすい

では、L2 話者間のコミュニケーションにおいて、こうした敬語不使用の意識はどのように作用するのだろうか。「他の外国人と日本語で話すときは、年が上でも普通体（ため口）を使うことが多いか」についての結果を示したのが図4である。「非常にそう思う」は22%、「そう思う」は全体の半数にのぼり、7割以上のL2話者が自身と同様に日本語を第二言語とする話者とのコミュニケーション場面で普通体を使いやすいと感じて

いることが明らかになった。表2は、L2話者が自分と同じL2話者に対して普通体を使用しやすくなる理由についての自由記述をまとめたものである。

表2 L2話者間の日本語使用場面における普通体使用の理由

理由	回答例
① 敬語の難しさ (14)	敬語の使い方は難しい、日本人もうまく使えない(タイ)、敬語より易しいから(中国)、簡単(中国)
② 親しさ・連帯意識の表明、人間関係の促進 (11)	人間関係が良くなると思う(タイ)、もっと友だちになりたいから(マレーシア)、同じ留学生なので、仲間同士と思うので(韓国)
③ 気楽さ (10)	もっとリラックスできる(ガーナ)、気楽に話せるから(韓国)
④ 使いやすさ (7)	やっぱり普通体使いやすい(中国)、外国人にはなぜかため口が使いやすい(韓国)
⑤ 年齢差を意識しない (4)	外国人同士だから年とか気にしていない(中国)、留学生同士だったら、年の壁がなくなるから(ベトナム)、年がわかっても外国人同士は上下関係はない(韓国)
⑤ 情報伝達 (4)	一番良く伝わると思う(ウガンダ)、その方が相手にしっかり伝わる(韓国)
その他の回答	<母語の影響>母国語ではなすときでも気にしたことないから(中国)、<日常的使用の影響>ため口を使うことが多いから、つい口に出しちゃう(中国)、<対話者のスタイルへの同調>相手も使わないから(タイ)

※「理由」における()は回答数を表す。

最も多く挙げられたのは「敬語の難しさ」^①である。注目すべきなのは、「留学生はお互いに日本語の敬語が使いにくいことを知っているから(普通体使用を)理解してくれる」(韓国)、「外国人は敬語の大変な点が良く分かるので、私の経験から見ると、外国人は他の外国人に話

しかける時敬語を使わなくてもいい」(イギリス)といった回答に見られるように、L2 話者は自分と同様に日本語を第二言語とする対話者が「敬語の難しさ」という意識を共有しているとの認識を持ち、それが普通体選択の要因として挙げられていることである。また、「ため口を使っても(相手が)怒らない」(中国)、「お互いに違和感を感じないから」(中国)といった回答から、普通体を使用した場合の相手の反応を推測したり、敬語不使用は相手にとって問題がないと感じたりしていると考えられる。

上記の結果から、普通体は L2 話者にとって、互いの連帯意識を確認し合い人間関係を促進する“we-code”⁽²⁾として機能し、気楽に話せるスタイルとして自発的に選択されていることがわかる。また、外国人同士のコミュニケーションでは、「年齢」という社会的要因が弱くなり、年上の対話者に対して敬語使用が求められる日本語の規範意識について原則化されない傾向があることが伺える。

3.2 敬語に対する否定的イメージ

日本語学習者の敬語意識に関するこれまでの研究では、敬語に対する心理的不安や否定的イメージが観察されている(例えば、杉山 2003、徳間 2010、藤原 2012)。本節では、敬語使用時の緊張と、敬語の簡素化に対して、いかなる傾向性が示されたのかについて分析する。

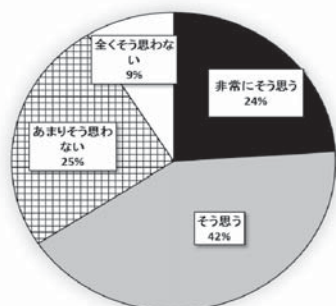


図5 敬語を話す時、緊張する

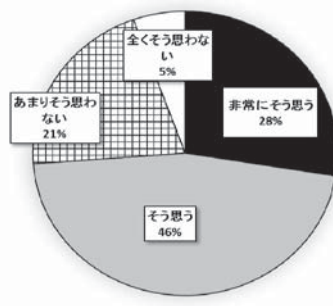


図6 敬語はもっと簡単にした方がいい

まず、「敬語を話す時、緊張する」(図5)については、ほぼ4人に1人が「非常にそう思う」と回答した。

「そう思う」を合わせると66%となり、調査協力者の約3人に1人が、敬語使用時に緊張するとの結果であった。敬語使用は L2 話者の心理的負担に繋がるという先行研究で示された傾向性が本研究におけるデータにも現れているといえる。また、図6の敬語の簡素化については、74%が「敬語をもっと簡単にした方がいい」と回答しており、「そう思わない」の値を大きく上回った。敬語体系及びその難しさに対する意識から導かれる回答であると思われる。

3.3 敬語習得と敬語の規範に関する意識

3.3.1 敬語習得

ここでは、敬語習得及び敬語規範という観点から、L2 話者の敬語観を捉えたい。

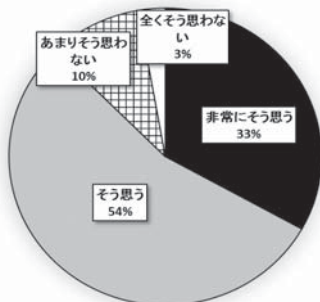


図7 日本語学習者は、必ず敬語を学ぶべきだ

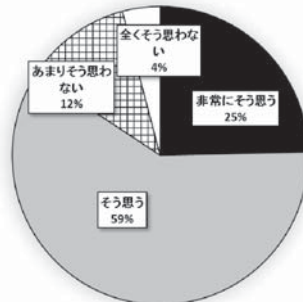


図8 日本語学習者は、敬語を正しく使えるようになるべきだ

図7、図8はL2 話者の敬語習得に関する意識を表している。日本語学習者が「必ず敬語を学ぶべき」と考える人は 87%、「正しく使えるようになるべきだ」に同意する人は 84%を占めており、いずれも高い割合を示している。ほとんどのL2 話者は敬語を習得し、正しく使う必要性を感じていることがわかる。

3.3.2 他者の敬語回避に対する評価

ここで、上記の敬語習得意識の高さと結びついていると考えられる調査結果を示したい。本調査では、敬語使用を回避するL2 話者の意識に対し、他のL2 話者がどう捉えるのかという調査項目を設定した。その内容として、「日本に住む外国人が『私の国のことばには、敬語がありません。敬語を話すと、自分でない気がするので、使いたくありません』とっています。普段も、初対面や目上の人に対して、普通体（ため口）を混ぜながら話しています。この人は、敬語を使うべきだと思いますか」という問いを立てた。図9をみると、自分らしさの維持を理由に、自身の母語にない敬語の使用を回避するL2 話者に対し、「(その人は)敬語を使うべきだ」と考える人が約7割にのぼることがわかる。3.1

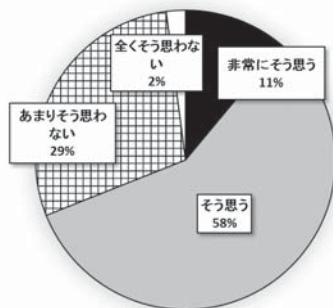


図9 敬語使用を回避する外国人は敬語を使用すべき

の分析においては、目上の人に対して普通体使用を望むL2 話者の傾向性が確認されたが、本節での結果は、「敬語使用を回避するのではなく敬語を使用すべき」と他者に敬語使用を求める意識が色濃く表れている。調査協力者が記した自由記述（72名が回答）を分析すると、その理由は以下の3つに大別できる。

敬語使用を望むL2 話者の傾向性が確認されたが、本節での結果は、「敬語使用を回避するのではなく敬語を使用すべき」と他者に敬語使用を求める意識が色濃く表れている。調査協力者が記した自由記述（72名が回答）を分析すると、その理由は以下の3つに大別できる。

表3 「敬語を回避するL2話者は敬語を使うべき」の回答理由

①日本社会への統合的要因 ⁽³⁾ (40)	②その人にとってのメリット (9)
<ul style="list-style-type: none"> ・郷に入っては郷に従え(6) ・日本のルール・習慣に従うべき (15) ・日本文化である敬語を学ぶべき (13) ・日本に住んでいるから (6) 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係が良くなる (6) ・しつこくを良く見せるために必要 (1) ・住んでいる環境に慣れなければ生活が難しくなる (1) ・結果的に自身に役立つ(1)
③敬意を表すため、失礼にならないために必要 (9)	

<その他の記述>

- ・他の人の気持ちを心地よくするほうが大切だと思う (マレーシア)
- ・使わないとばかな外人のイメージを表すと思う (イギリス)

最も多かったのは、「日本社会への統合的要因」である。「郷に入れば郷に従え」(6名が回答)という記述に代表されるように、敬語使用は日本社会に存在するルールであり、それに従うことが日本社会への適応手段とする考え方である。回答数が40名にのぼることから、敬語使用が日本社会の規範として求められていることを多くのL2話者が意識していることがわかる。

第二の理由は、敬語使用が良好な人間関係の構築に繋がる等、「その人自身にとってのメリット」が存在するという見方である。ここには、「使ったら関係が親しくなっていく。(使わないと)仲間に入れなくなる」という記述も含まれており、敬語不使用を社会集団からの排除と結び付けて捉えようとする回答も見られた。第三に、「目上の人には敬意を示すべきだ」「失礼にならないために必要」という敬意を表す行為そのものの肯定が挙げられる。

また、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した調査協力者の理由としては、「敬語の難しさ」(5名)、「行動・性格で敬意を示せる」(5名)、「ゆっくり学んでいけばいい」(3名)、「その人のやり方でいい」(3名)、「敬語は面倒くさい」(2名)、「外国人だから仕方ない」(1名)、「無理に使うと間違える」(1名)、「いろんな国の人の多様性を理解したい」(1名)、「敬語は格差社会、差別だ」(1名)といった回答が見られた。

3.3.3 敬語の美しさ

敬語はしばしば「日本語の美しさ」と結び付けられて語られることがある⁽⁴⁾。図10を見ると、敬語に美しさを感じるL2話者の割合は、「非常にそう思う」が10%、「そう思う」が49%で、約6割を占めている。「全くそう思わない」「あまりそう思わない」は41%であった。

美しいと感じる理由（自由記述）をまとめたものが図 11 である。敬語の美しさを感じる理由としては、敬語表現そのもの（言語内的要因）より、敬語を使用する人に対して想起するイメージ^⑤（上品、知識等）や他者に対する配慮、人と人との繋がりといった対人関係的要素が多いことがわかる。

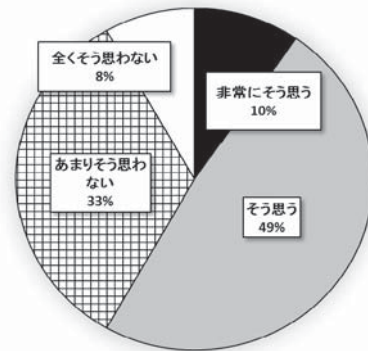


図10 敬語は美しいと感じる

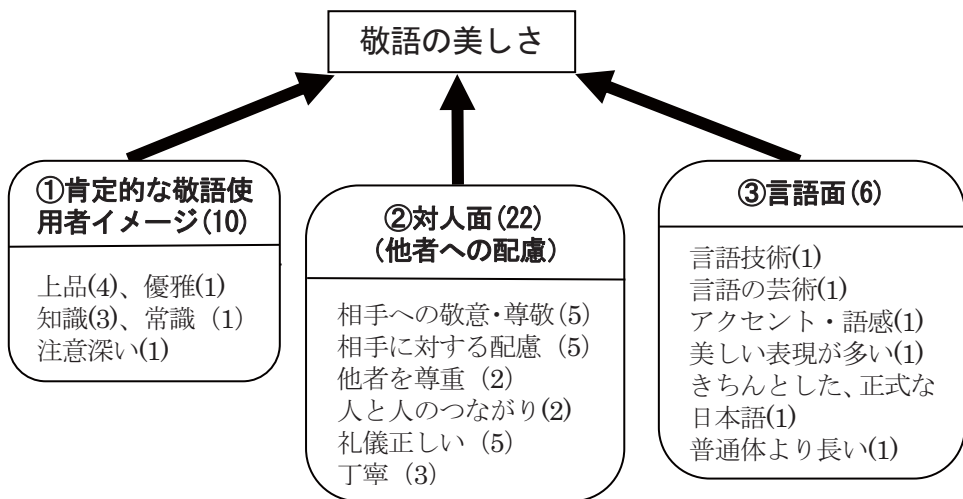


図 11 「敬語の美しさ」につながる3つの要素

一方、敬語に美しさを感じないと回答した理由については、「使用が面倒くさい」（6名）、「人間関係作りの壁になる」（5名）、「硬い」（4名）等、敬語に対する否定的イメージが理由となる場合と、「言葉にきれいという concepts はない」「ただのことばですから」等のように、ことばと「美しさ」を結び付けること自体を否定する意見（4名）も見られた。

3.4 敬語意識の変容

最後に、来日後の敬語意識の変容について分析を行う。図 12 は「日本に来てから敬語についての考え方が変わったか」という問いに対する回答を示しているが、敬語意識が変化した割合は28%であった。「どのように変わったか」という問いに対する31の自由記述を分析したところ、「必要なものだと考えるようになった」（8名）等、来日後に敬語の重要性が認識された

との回答が最も多かった。次に、「来日前は面倒くさいというイメージだったが、来日後は日本語の特徴できれいだと思う」（インドネシア）といった意見に見られるように、敬語に対する肯定的なイメージが強くなったという意見が6名から出された。その他、「思ったより使われていてびっくりした（発見）」（3名）、「来日後に使うようになった（使用頻度の増加）」（3名）や「もっと勉強したいと思うようになった（学習意欲の向上）」（2名）等、日本人とのコミュニケーションにおいて敬語使用を分析し、

敬語を肯定的に捉える視点を持つようになったという傾向性が見られる。その一方で、「日本語が難しいと思った」（中国）、「日本には尊敬語しかないと思ったのですが、謙譲語もあるということを知って、敬語は思ったより紛らわしいと思います」（インドネシア）、「来日する前に敬語はいいことだと思っていたが、今は敬語が大嫌い」（イギリス）等、来日後にマイナスイメージが強くなったという回答も一定数存在する。

4. 考察

本調査では、日本語 L2 話者の敬語使用意識について4つの観点からの分析を試みた。まず、「敬語不使用に関する意識と実態」においては、親しい目上の人に敬語を使いたくないと感じる L2 話者の意識が浮かび上がった。L2 話者同士のコミュニケーションでは、使い分けの難しい敬語の使用が回避され、気楽さ・使いやすさという点で普通体が多用されている様相が明らかとなった。本研究で挙げられた L2 話者の敬語不使用の理由から、L2 話者間のコミュニケーションにおいては年齢という社会的要因により規定された待遇表現の使い分けという要素が弱まり、上下関係よりも親疎関係が重視される傾向があるといえるだろう。つまり、L2 話者間のコミュニケーションでは、敬語使用が求められる日本語の規範の解除（伊集院 2004、藤原 2015）が行われる傾向が強いと考えられる。こうした規範の解除は、第二の分析の観点である「敬語に対する否定的イメージ」（敬語使用時に緊張する、敬語をもっと簡単にした方がいい）とも無関係であるとは言いがたい。しかしながら、本研究のデータからは、敬語に対する否定的なイメージを持つ L2 話者が一定数存在する一方で、日本社会の中で求められる敬語使用の規範を感じつつ、敬語使用を日本社会への適応手段の一つ捉え、「郷に入っては郷に従え」という同化主義的な見方が示された。敬語を選択するか否かという言語行動は、自身が敬語に抱く

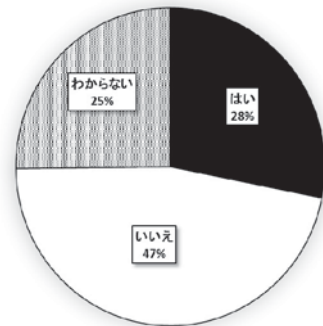


図12 来日後の敬語意識の変化

イメージのみに基づいて行われるのではなく、目の前にいる対話者がどのような敬語観を持った話者なのかを推測・分析し、また時にはその話者と自身の間に共有する敬語観を想定して自身の待遇レベルを能動的に選び取る行為であるといえる。Kasper(1997:120)は、第二言語話者は、目標言語の文化・言語と彼ら自身の文化・言語との相違について、自身の「非明示的な理論」(their own implicit theory)を持っており、第二言語における言語行為はその理論により導かれると述べている。本研究におけるデータにおいても、L2 話者は日本語母語話者・他の外国籍の人々とのコミュニケーションの特徴やスタイル、自身との共通点や相違点について分析し、自身の「理論」を用いながら待遇レベルの選択を行う能動的な話者であるといえるのではないだろうか。また、その理論は、日常の他者との協働的な対話を通して、塗り替えられ、変容し、再構築されていくのである。

5. 今後の課題

本稿では、第二言語話者の持つ敬語意識について考察したが、今後さらにデータを拡充することで、母語での敬語体系が日本語の敬語についての意識にいかに関与を与えるのかを深く見ていく必要があるだろう。本研究でのデータにおいては、数は多くないものの、自由記述に「母語の影響」を挙げる意見が見られた。今後、海外における日本語学習者に分析対象を広げることで、第一言語における敬語体系の有無による敬語観への影響を具体的に探っていきたい。また、本稿では敬語意識の変容についても分析を行ったが、さらに第二言語話者の敬語意識を縦断的に考察することで敬語意識がいかなる要因により変化していくのかを捉えていくことも重要だろう。

注

- (1) 本稿の分析項目には含まれていないが、今回の調査では「敬語の使い分けは難しい」についても問うており、72%の調査協力者が敬語の使い分けが難しいと感じているとの結果であった。
- (2) Gempurz(1982)により示された概念で、“they-code”と対照的に用いられる。本稿では、仲間内で用いられ、対話者との心理的距離を小さくする変種という意味で用いる。
- (3) 本稿における「統合的要因」とは、社会の成員により統一した規範・ルールを共有することが是とされ、ある社会において文化的少数者がその社会の多数派のやり方に従い、自らの様式を多数派の様式に合わせる（または合わせることを求められる）ことを指す。
- (4) 敬語を美しいとする言説が持つイデオロギー性については山下（2001）を参照されたい。

(5) 「上品」等のイメージは、人に対してでなく言語に対するイメージも考えられるが、自由記述において「日本人の上品さ」等の表現で表され、言語話者に対して抱いているイメージと判断されるものをカウントした。

参考文献

- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け：母語場面と接触場面の相違」『社会言語科学』第6巻第2号 12-26 社会言語科学会
- 杉山アイシェヌール (2003) 「外国人から見た敬語」『朝倉日本語講座8 敬語』 菊地康人 (編) 252-275 朝倉書店
- 徳間晴美 (2010) 「中上級日本語学習者が抱く敬語使用不安の様相：学習者のことばに基づく質的分析による事例」『言語文化と日本語教育』40号 41-50
- 藤原智栄美 (2011a) 「日本語学習者の敬語意識に関する事例研究」『茨城大学留学生センター紀要』第9号 19-31 茨城大学留学生センター
- 藤原智栄美 (2011b) 「韓国人日本語学習者の敬語観に関する一考察」『ユーラシア研究』8/4, 237-256
- 藤原智栄美 (2012) 「台湾人日本語話者の敬語意識：PAC分析（個人別態度構造分析法）を用いた事例研究」『多元文化交流』第4号 115-129 東海大学日本語文学系
- 藤原智栄美 (2015) 「敬語（不）使用の意識と相互交渉：多元文化社会において日本語第二言語話者の敬語観をいかに捉えるか」『ことばの「やさしさ」とは何か：批判的社会言語学からのアプローチ』義永美央子・山下仁 (編) 73-103 三元社
- 文化庁 (2006) 『日本人の敬語意識：平成17年度国語に関する世論調査』国立印刷局
- 山下仁 (2001) 「敬語研究のイデオロギー批判」『「正しさ」への問い：批判的社会言語学の試み』野呂香代子・山下仁 (編) 51-83 三元社
- Gumperz, John J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.
- Kasper, G. (1997). The role of pragmatics in language teacher education. In K. Bardovi-Harlig & B. Hartford (Eds.), *Beyond methods: Components of second language teacher education* (pp.113-136). New York: McGraw-Hill College.